

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第457号 平成24年12月17日

国際教育調査

文部科学省は12月11日、63カ国・地域が参加した2011年の「国際数学・理科教育動向調査（TIMSS）」の結果を公表しました。

■平均得点と順位の変遷

	1995年	1999年	2003年	2007年	2011年
小学4年	1995年 (26)	1999年	2003年 (25)	2007年 (36)	2011年 (50)
算数	567点 =3位	調査せず	→565点 =3位	→568点 =4位	↗585点 =5位
理科	553点 =2位		↘543点 =3位	→548点 =4位	↗559点 =4位
中学2年	1995年 (41)	1999年 (38)	2003年 (46)	2007年 (49)	2011年 (42)
数学	581点 =3位	→579点 =5位	↘570点 =5位	→570点 =5位	→570点 =5位
理科	554点 =3位	→550点 =4位	→552点 =6位	→554点 =3位	→558点 =4位

「↗」は平均得点が前回より有意に上昇、「↘」は低下、「→」は有意差なし。カッコ内は参加した国・地域の数

その結果は上記の表（12月12日付朝日新聞から貼付）の通りですが、この結果について文部科学省では、

- ・小学校では、各教科とも前回調査に比べ平均得点が有意に上昇すると共に、習熟度の低い児童の割合が減少し、習熟度の高い児童の割合が増加した。
- ・中学校では、各教科とも平均点は前回調査と同程度だが、習熟度の高い生徒の割合が増加した。

とし、脱ゆとり教育への転換の成果が出たと評価しているようですし、佐藤学学習院大学教授も「学力低下に歯止めがかかったのは事実」とコメントしています（12月12日付朝日新聞）。

しかし、下表を見ていただくと、今回の調査だけで果たしてその様に評価して良いのか疑問に感じると思います。

というのは、上位5か国・地域の習熟度別の割合を見ると、小学生（1位は韓国、日本は4位）では、

	550点未満	550点以上	625点以上
韓国	27%	44%	29%
日本	42%	44%	14%

中学生（1位シンガポール、日本は4位）では、

	550 点未満	550 点以上	625 点以上
ソウダホール	31%	29%	40%
日本	43%	39%	18%

となっており、小学生、中学生共に625点以上の最上位者の割合が1位の国の半分以下と少ない事が分かります。その意味では、まだ全体の学力を引き上げていく牽引力、パワー不足を感じます。

その原因の一つは、学びへの意欲の低さにあるかも知れません。

児童生徒への質問調査の結果（文部科学省資料から）を見ると、下表の通り、小学校の段階では国際平均と比較して遜色がないのに、中学になると途端に勉強への関心や意欲が薄れるというのは非常に気になります。

・勉強は楽しい

	小・算数	小・理科	中・数学	中・理科
2011 調査	73%	90%	48%	63%
国際平均	84%	88%	71%	80%

・勉強が好きだ

	小・算数	小・理科	中・数学	中・理科
2011 調査	66%	83%	39%	53%
国際平均	81%	86%	66%	76%

OECDによる学習到達度調査（PISA）において、日本の子ども達の学力低下が顕著になり、脱ゆとり教育へと舵が大きく切られた訳ですが、今回のTIMSSの結果を見る限り、一定の成果はあったといえるでしょう。このTIMSSは学習の習熟度を調べるものですから、脱ゆとり教育を徹底すれば今後更に成績が上がると思われます。しかし、子ども達の学ぶ事への意欲が低ければいずれ限界が来ることは明らかです。

「数学・理科を使う事が含まれる職業につきたいか」という質問に対して、日本の子ども達の反応が国際平均と比較すると半分以下というのは、学ぶ事が自分の将来と結び付いていない事の証左です。

学ぶ事の楽しさを知らず、また、学ぶ事が自分の将来へ結び付いていかない、こうした状況では学ぶ意欲が湧いて来ないのも致し方ありません。

教師の皆さんには、学ぶ事の楽しさ、新しい知識を習得する喜びを教え、主体的に学ぶ意欲を育てて頂きたいと思いますが、しかし同時に、教師の皆さんが如何に努力しても、今の大人たちが夢もなく疲れ切った状態では、子ども達だって「勉強してもしょうがないや」という事になりかねません。

まずは、今の大人達が、もっともっと夢や希望の持てる社会を創る為に、目を輝かして頑張る欲しい、そういう姿を子ども達に見せて欲しいと願っています。

（塾頭：吉田 洋一）